| | |
|---|---|
| Title | 聖・栄光・献身 ： イザヤ書第六章一～五節　ヨハネによる福音書第一七章一、四～五節 |
| Author(s) | 小倉，義明 |
| Citation | キリスト教と諸学 ： 論集, Volume22, 2007.3 : 66-72 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3238 |
| Rights | |

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 聖・栄光・献身

――イザヤ書　第六章一～五節
ヨハネによる福音書　第一七章一、四～五節――

小倉義明

## 〈序〉二〇〇五年年頭大木講演

昨年のこの研修会において、大木英夫理事長・院長は、聖学院はその名の頭に戴く〈聖〉に注目すると言われた。そして、ヴィンデルバントに言及され、また男子聖学院の校歌が

ここにて学ぶ　真善美を
ひとつの聖に　すべくくりて
神と人とに　ささげつくす
これぞわれらの　尊き使命

と唱っていることに注意を喚起された。

このことを受けて、本日は〈聖〉を聖書学的に要点だけだが考察してみたいと思う。

## 〈一〉預言者的伝統における〈聖〉

神を〈聖〉と据えた点で、旧約宗教は古代中近東の諸宗教のなかで、際立った特色を有している。このことは、古代宗教においてのみならず、広く世界の精神史にとっても比類なき貢献であった言い得よう。

〈聖〉はヘブル語で qodesh であるが、語源学的に語根 q-d-sh は西方セム語において〈分離〉を意味するものであったことは、概ね認められている。

しかし、この語 qodesh をもって専ら神の本質を言い表わす時のみに用い、そのことによってこの語の意味論的な発展・深化をもたらしたのは、古代ヘブライ人であった。イザヤを代表とする預言者的伝統にあっては、qodesh は物事の単なる分離（人間が触れることができない禁忌タブーと言った）に止らなかった。むしろ、それは神のみが持ち給う自由なる本性、人格的他者性を意味するものであった。預言者たちにとって、神は人間の願望や欲求の直接的な反映ではあり得ず、そうした人間の欲望の總体から〈分離して〉、人間の内面や行為を問う人格的他者であった。

けれども神のこの〈他者性〉は、単に人間を峻拒するのではなかった。神の qodesh は他者性でありつつ、人格的他者として積極的に活動するのである。預言者的qodeshは、北極星が高くただひとり極北にあるように静止的 static であるのでなく、ベツレヘムの星が動いて歴史と関わるように動的 dynamic なのである。

神の qodesh が動的であるという点で、私たちは qodesh が kabod と結びついていることに注目したい。kabod とは「燃えるような輝き」を言い、神の臨在を示す。即ち神は燃えるような輝きの中に臨在するのである。神の聖なる他者性 qodesh は、積極的に活動して、燃える輝き kabod として人間に接近するのである。二、三の聖句を例示する。

「主はシナイから来られ……
パランの山から光を放たれ……
その手には燃える火があった」（申命記三三章二節）

「ケルビムの上に座せられる者よ、
光を放って下さい。
神よ……み顔の光を照らして下さい」（詩八〇篇一～二節）

本日のテクスト、イザヤ書六章を見てみよう。この箇所は預言者の召命体験が語られており、彼の深遠な神観が表わされているところだ。イザヤの宗教体験の根源は「聖なる神」である。聖にして他者なる神が、目も眩むばかりの輝きとして彼の前に立ち顕われたのだ。イザヤは直ちに、罪と穢れの自分を自覚させられる。それは、彼にとって滅び、絶対的な審きであるはずであった。

しかるに、神の qodesh は彼を峻拒するよりは kabod として彼を包む。kabod は、人間の罪と穢れの闇を駆逐する光であったのだ。そこに、イザヤは神の赦しと召命とを聞きとったのである。

## 〈II〉新約聖書における〈栄光〉

以上のような神の栄光 kabod についての救済論的な把握は、イエス・キリストにおいて頂点に達する。

この世の栄光 gloria mundi は、己れの権威・権力・栄華を求める自己栄化であるが、イエス・キリストにおいては、神の栄光 gloria Dei は人間救済のための自己犠牲でなければならなかった。

イエス・キリストは〈栄光〉を徹頭徹尾自らの受難と結びつけている。彼は、エマオ途上の弟子たちに、次のように教え諭されている。「キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったか」（ルカ二四章二六節）と。

ヨハネ福音書は、キリストの出来事、その生と死と復活を神の栄光の啓示（doxophany）と見た。ヨハネ福音書は、その冒頭からこうした把握を提示している。「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその〈栄光〉を見た。それは父のひとり子としての〈栄光〉であって、めぐみとまことに満ちていた」（一章一四節）

即ち、ヨハネは、神の栄光はキリストの受難において顕わとなり、キリストの受難は神の栄光のための彼の最後の、そして決定的な奉仕であることを、把握したのである。

イエス・キリストご自身の言葉をヨハネ福音書から更に見てみよう。

「人の子が〈栄光〉を受ける時が来た。よくよくあなたがたに言っておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。…父よ、み名があがめられますように」（ヨハネ　一二章二三～二四節）。

ここで、弟子たちへの主イエスの教え諭しは、ついに「父よ、み名があがめられますように」という祈りに変わっていく。こうして本日の第二のテクスト、ヨハネ福音書一七章一節以下へつながってゆくのだ。「み名があがめられますように」という神の聖性 qodesh に対する頌栄・讃美が、イエス・キリストの最後の願いである。その頌栄のために死を賭して献身することが彼の覚悟であった。その献身は神の栄光でありつつそれの反映として子たる者の栄光になるのである。キリストにおいて、献身は何よりも神の栄光の宣揚であったが、それとともにその神の栄光の照り返しとして自らの栄光でもあったのだ。

同じことが、キリストに従い、キリストの献身に従おうとする者たちにも起る。使徒パウロは言っている。

「わたしたちはみな、……主の栄光を鏡のように反映させながら、栄光から栄光へと主と同じ姿に変えられていく」（Ⅱコリント三章一八節）。

しかり、私たちの旧き外なる人は滅んでも、内なる人は日毎に新しくされ、主と同じ姿に変えられていく。キリストの献身の姿の輝きを受けて、私たちも同じように燃え出すのである。

## 〈結〉

預言者イザヤは言っている。

「イスラエルの光は火となり、

その聖者は炎となる」（一〇章一七節）と。

しかり。神はイエス・キリストにおいて、炎となって燃えておられる。人間救済のために己れを炎とし給うのだ。

そのさまは、キャンプ・ファイアーの薪が己れを燃やして光と熱を周囲に与えるのに似ている。薪は燃えて、ついに灰となる。それは薪にとって敗残の姿であろうか。否、決してそうではない。燃えて自らの存在を灰に化してしまうまで、他者に光と熱を与えてゆく。それは薪の完成の姿、薪の栄光ではないだろうか。輝くとは、燃えることだ。

輝くべきものは、燃えることに堪えねばならない。

わが聖学院大学は、〈聖〉を冠にした大学である。私たちの頭上に戴くのは、神の〈聖〉である。神の聖は、イエス・キリストにおいて人間救済のために自己犠牲的に燃えている。

その神の熱情を仰ぎ見ることだ。

その神の熱情に打たれることだ。

その時、私たちも燃え出さずにはいられないであろう。

その時、私たちも献身の輝きを身に帯びるようになるであろう。

二〇〇六年一月六日　教職員研修会開会礼拝